



「福祉の一端を担える喜び」

忍ヶ丘集會協力牧師 河 尚 志
(カナン・ルーテル、西神ルーテル教会牧師)
感じました。

福祉系の大学に通っていたわたしは、兄の仕事の関係先だった沖縄県の特別養護老人ホームで実習をすることになりました。正直に言いますと、当時のわたしは、福祉を学びたいというよりも沖縄で遊びたいという思いの方が強かったです。そんな若いわたしの下心を、ご指導くださった施設の課長はお見通しだったようです。人間的にも社会的にも未熟なわたしの成長のためにプログラムを組んでくださり、その中で、デイ・サービスで実習させていただいたことが、わたしの将来に大きく影響しました。

デイ利用者の皆さんはとても社交的で、わたしが本土から来た学生ということもあり温かく接してくださいました。テンポの速い沖縄民謡がデイ・ルームに流れると、皆さんノリノリで踊られました。明るさと元気にあふれたデイでしたが、集われるお一人おひとりの人生に思いを向けた時、わたしは沖縄のお年寄りたちが通ってこられた道を想像せずにはおれませんでした。

実習した 1995 年の夏は、ちょうど戦後 50 年目に当たる年で、テレビや新聞でもそのことを盛んに取り上げていたと記憶しています。デイ利用者は 70~90 才代ですから、ここに集うお年寄りたちは 50 年前、つまり 20~40 才の青春、仕事、結婚、子育ての時にあの戦争を体験され、そして今日まで一生懸命働いてこられたんだ、と気づきました。歳を重ね介護を受けておられる皆さんの、手と顔の深いしわに、悲しみも苦労も刻まれているのだと思うと、わたしが社会福祉に携わるといことが、わたし自身にとっても、また世の中全体にとってもすぐ価値のある幸せなことではないかな、と

沖縄での経験を機に、高齢者福祉施設、特にデイ・サービスで働きたいと思うようになったわたしは、大学 4 年生の時、大阪の大きな体育館で開かれた福祉施設の合同就職説明会に参加しました。当時、新しい施設が次々と建てられていました。求人も多く、たくさんの施設がブースを出していましたので、どこを選べばよいのかさっぱりわからなかったわたしは、鉛筆の倒れた方を選ぶくらいの感覚で数施設にエントリーし、そのうちの一つ、大阪市内のデイ・サービス事業所に採用いただくことになりました。

さて、そのデイ・サービスでわたしより先に働いていたのが、クリスチャンで牧師の娘でもあった今のわたしの妻でした。教会に一度も行ったことのなかったわたしを彼女はクリスマス・イヴの燭火礼拝に誘ってくれました。その後続けて教会に通うようになり、イエス・キリストを救い主と信じて 24 才の時に洗礼を受け、翌年に結婚しました。福祉の仕事が自分に合っていると思っていたのですが、30 才の時に神さまの召命を受けて献身し、牧師になりました。妻も福祉に思いがありましたが、わたしが牧師になったことで牧師の妻になりました。

「人の子は仕えられるためではなく仕えるために、また、多くの人の身代金として自分の命を献げるために来たのである。」(マルコ 10 章 45 節) イエスさまのお言葉です。多くの人の幸いのために働く福祉の心は、すべての人の救いのために払われたイエスさまの犠牲の愛に通じていると思います。教会の働きに召されている傍ら、る

うてるホームの社会福祉にかかわらせていただき、そのうえ、忍ヶ丘集会の皆さんと礼拝ができることを、神さまからのプレゼントと思って感謝しています。



「スピリチュアルケア研修に参加して」

通所事業部 白木美希

10月1日、講師の関野和寛牧師よりご自身の米国におけるチャプレンの活動やスピリチュアルケアの現状をテーマにホーム内で受講しました。

講義では、米国でのご自身の体験談を交えて日本との考え方や活動の違いについてもお話を聞くことができました。

その中で、看取りの時に掛ける6つの言葉を伝えられるように環境を整えることもチャプレンの務めであることを知りました。その6つの言葉は感謝や贖罪、敬愛や再会を表したものでそこに必要なのは大層な思想や高度な技術でもなく日常のなかにある相手を気遣い、思いやる言動にあるのだと気づかされました。ひとが人生の最後に自身の大切なものを握りしめることで結ばれた大切なものを守れるように、そのひとの魂にそっと寄り添うことが最善のケアにつながるというお話も深く印象に残りました。

また、自身のアイデンティティを失う体験をするというワークショップもあり、今の私自身を見つめる良い機会にもなりました。

日々、スタッフとして私たちにできる最善の支援・ケアにつなげるためにはどうすれば良いのか。いま目の前にいるあなたの心はどうしたら救われるのかを、他の誰でもない私自身に問い続けながら少しでもその人の心に近づくために前へ進みたいと考えています。

そういった想いもあり、現在も様々な障がいや病と共に生きる方たちの生活を支援させていただいているのだと思っています。そして、スタッフ間で思いを同じくする仲間と支え合うことで決して独りではなく、重荷を分け合える環境に恵まれたことは私の看護師人生において大きな財産だと感じています。

だからこそ自分ならどうしてほしいかを考え、その人の心に寄り添いたいと思えるのだと気づきました。講義のなかでも、スタッフの心のケアの重要性についても触れられており、多忙な日常に追われ置き去りにしてしまった自身の心と向き合う時間も大切にしたいと思いました。

魂という形の分からない存在に触れるためにも、私は声にならない想いも伝え続けたい。そして、その想いが病の果てに旅立つひとの心をそっと包み寄り添うことで少しでもこの世で受けた苦しみから魂が解放されることを信じてこれからも自身の職務と向き合っていきたいと思います。



「自分たちの研修を目指して」

地域支援事業部副部長 神谷葉子

どこか他人ごとのように感じていたスピリチュアルケア研修を自分ごととして受けられるようにしたいと思い、研修会の運営に積極的に参加させてもらうことにしまし

た。今回の研修の目的は『“スピリチュアル”を知り、“スピリチュアルケア”と私たちの目指す“うるてるケア”を考える機会にする』としました。私自身は法人から

与えられた研修ではなく私たちの研修であることを示していけるような研修にしたいという思いがありました。企画チームで、それぞれの役割を明確にし、協力者への依頼、当日までに準備すること、当日行うこと等について、何度も話し合い、確認をしました。

企画をしたことで職員の私たちが自分たちの研修だという体感もてました。また、

スピリチュアルペインを自分ごととして感じることができました。

今年度は当日参加できなかった職員に向けてフォロー研修を企画しています。関野先生のロックなスピリチュアルケアについての講義を一人でも多くの職員と共有できたらと思っています。スピリチュアルケア研修は一人ひとりが、るうてるケアについて考える機会になればいいと思います。

「東京老人ホームとの合同研修」

特養事業部主任 穎 娃 和 典

るうてるホームでは同じキリスト教主義を掲げ、ルーテル法人会連合の仲間である東京老人ホームと定期的に合同研修を実施しています。わたしたちは四期生で、さまざまな部署から4名が選抜され、昨年「人材マネジメント」というテーマでディスカッションを重ねてきました。新型コロナウイルスの影響で、今のところ東京老人ホームのメンバーと直接会うことは叶っていませんが、オンラインセッションを2回実施しました。来年こそは実際に対面にて親睦を深めたいと願っています。

るうてるホームは57年の歴史ある施設ですが、東京老人ホームは来年100周年を迎える大先輩です。1世紀ものあいだ、「キリスト教」、「福祉」という同じ価値観のもとで事業を継続し続けてこられた秘訣を学ばせていただきたいと思います。

歴史から教訓を得る一方で、時代の変化に対応する柔軟性も不可欠となってきています。新型コロナウイルス感染症のまん延、ロシアによるウクライナ侵攻による脅威など、グローバル社会のなかで、今まで想像もしてこなかった現実が実際に起きています。このような社会の移り変わりの中でも、よく観察し、調べ、考え、最善と思える決断をする。そういった自立型の人材マネジメントが我々に課された使命です。

議論を重ねていく中でわたしたちは「オーナーシップ」、「心理的安全性」という2つのキーワードに辿り着きました。オーナーシッ

プとは自ら主体的となって、能動的に社会や環境を変えていく考え方をいいます。他責ではなく自責で、また自利ではなく他利で物事を捉える視点が重要で、そのうえで欠かすことができないのは心理的安全性の担保です。

福祉の世界では業務を遂行するうえで職員は心身ともに大きなストレスとプレッシャーに晒されます。そのなかでも安心して働ける良質な職場環境構築を目指すには、法人全体で失敗を責めずに挑戦することを評価する風土をつくるのが大切になります。減点方式ではなく加点方式で職員同士がお互いに支えられつつ支えあうことができれば、皆が心を惹かれる魅力的な施設になると確信しています。

研修は来年度まで続く予定です。学びを机上の空論で終わらせぬよう、実際の現場にどう落とし込めるかがこれからの課題です。職員の笑顔はお客様、ご家族、そして地域の方々への還元につながります。るうてるホームを笑い声あふれる場所にできるよう、これからも試行錯誤を繰り返してまいります。



